# 『野叟曝言』の評価

## ―― 台湾布袋戯の源流 ――

渡　邊　幸　彦

### はじめに

台湾では近年、「布袋戯（ポテヒ、指人形芝居）」を台湾を代表する文化遺産として官民挙げて振興していこうという機運の高まりが見られる。専門のチャンネルが開設されてはや十年になり、テレビ布袋戯が若者の間では既に一つの芸能ジャンルとして定着した感があるのに加え、21 世紀に入ってからは行政が主導して各地に記念館等が設立され、各地の人形劇団は、そういった施設とも連携しながら、ファッションとしてだけでなく伝統的なスタイルをも子供たちへ伝えるための地道な取り組みを行っている現状が、台湾を訪れてみるとよくわかる。

そもそも 19 世紀半ばに、主に泉州・漳州（中国福建省）といった対岸から渡ってきた移民たちによってもたらされたとされる布袋戯は、台湾において独自に発展を遂げてきた。その発展を可能にしてきた要因としては、いくつかの劇団とその花形人形師、とりわけ李天禄（1910 年台北大稲埕生）、黄海岱（1901 年雲林西螺生）という、ともに日本統治下の台湾に生まれた二人の伝説的な人形師の活動に負うところが大きい。その二人のうち、李天禄氏の方が、新たな境地を開拓しつつもどちらかといえば伝統的

なスタイルと技を追求したといえるのに対し、黄海岱氏の方は、伝統を守りつつもむしろ伝統に収まりきらないオリジナルな物語世界を作り上げていく方向に進んでいったという印象がある。そしてその結果として、黄海岱氏は、後にテレビという新たな媒体獲得への道を切り開くことになる、布袋戯上の伝説の英雄を産み出すことになるのである。

そもそもそういった台湾独自のキャラクターとその物語が生み出された背景には、日本の占領下におかれた台湾の特殊な事情があったわけであるが、その問題を考察する上での第一段階として、本稿では、まず布袋戯の英雄である「史艷文」の原案にあたる中国清代の通俗小説『野叟曝言』を取り上げ、その成立と受容の歴史についてまとめてみたいと思う。

## 1　『野叟曝言』の成立と中国における評価

### 1－1　『野叟曝言』の刊本

『野叟曝言』は、夏敬渠（1705～87、字懋修、号二銘、江陰人）の作である。歴史や儒教経典、さらには諸子百家、儀礼、音楽、兵法、法律、天文、数学といった学術全般に通じた作者が、中国各地をあまねく旅行した経験をも活かしつつ、その晩年、乾隆帝（在位 1735-1795）の時代に書き上げたものとされている[(1)]。しかし、この書は夏敬渠の生前は刊行されることがなく、彼の娘が父の死後これを埋もれさせるのを惜しんで、人に書写してもらったのが今日の原本となっているとのことである[(2)]。

それから百年後、清の光緒年間になって始めて二種類の刊本が現れる。最初の刊本は光緒 7 年辛巳（1881）毘陵彙珍樓活字本（辛巳本）で二十巻 152 回、巻首に知不足斎主人の序がある。この刊本は目次には 152 回の章を備えるものの、実際には 132 回から 135 回の四回分の正文を欠いている[(3)]。

それに継いで翌年刊行されたのは、光緒8年壬午（1882）の申報館排印本（壬午本）で二十巻154回、はじめに西岷山樵の序がある。（挿絵、総評が付せられている。）光緒7年刊本より回数に関しては二回分多く、欠けていたとされる四回分の正文が補われている。そのことについて、序文では、西岷山樵氏の先祖が夏敬渠と交流があり、『野叟曝言』の副本を手にしたいきさつが語られた後、以下のような説明がなされている。

> 乃今夏六月、余友程子自海上購得此書、以予好讀奇書、特以相贈、不覺大詫。余友爲述刊書之由、始知是書成于呉中書賈、而出之者、夏先生之后人也。然已缺失十一、不若吾家副本之全。余惟夏先生之爲人、著述震海内、傳世之文、當非一種。是書抒寫憤懣、寄托深遠、誠不得志于時之言、故深自秘靳、而不欲問世。今則去先生之世已遠、無所忌諱、其后嗣既出其書矣。……爰出全書、以出全書、以付余友、達諸海上之刊是書者、亟謀開雕、俾讀者快睹其全。并述藏書之由、以告先生之后人、證二百年前之交契云。（傍点渡邊）

この序によれば、すでに刊行された本に欠落があるのを見て、家に保存していた原作副本により補完して印刊したものであるとのことである[(4)]。この序文自身の信憑性についても議論があり、石昌渝氏は『野叟曝言』（作家出版社 1992）の解説で、光緒4年戊寅（1878）鈔本（中国社会科学院文学研究所藏）との比較を根拠として、壬午本が辛巳本を基礎として増補したものではないと結論づけている[(5)]。

さて、ここで問題にすべきは辛巳本では篇目のみ記されて正文が欠けていた部分、つまり壬午本で追加されたとされる132回から135回の内容についてであるが、その問題を考える際には、夏敬渠の時代以降の歴史の変遷と、『野叟曝言』が刊行以来どのような評価を受けてきたかという点を

考慮しなければならない。

### 1－2 『野叟曝言』の評価

現在『野叟曝言』が紹介される時には、分類上「言情（恋愛）小説」、「烟粉小説」といった区分に入れられることが多いように、本格的な通俗小説群からは一段低いところに位置づけられる印象がある。

魯迅の『中国小説史略』（下冊は1924. 3. 4脱稿、同6月新潮社より出版）では、第二十五篇「清之以小説見才学者（清代の小説で文才と学識を顕示するもの）」の中で、『野叟曝言』をこう紹介している。

> 以小説为庋学問文章之具、与寓惩劝同意而异用者、在清盖莫先于《野叟曝言》。其書光緒初始出、序云康熙时江陰夏氏作、其人“以名諸生貢于成均、既不得志、乃应大人先生之聘、輒祭酒帷幕中、遍历燕晋秦隴。……

「小説を学問文章の道具とみなして、勧善懲悪を意図するも効用の違う作品としては清において『野叟曝言』の先に出るものはない」というこの魯迅のことばが示すように、『野叟曝言』は清代に多く流通した通俗小説の中で、必ずしも小説のそのものの積極的な評価を受けたものではなかったといってよい。魯迅はさらに「意既夸誕、文復無味、殊不足以称藝文、但欲知当時所謂“理学家”之心理、則于中頗可考見。」とも付け加え、内容や文章は「藝文」とは言い難いとまで言っており、むしろ『野叟曝言』の中で全知全能の主人公として描かれる「文素臣」を作者の投影であると見て、当時の典型的な「理学家」であった夏敬渠の心理が見て取れると評したのである。

夏敬渠の生きた雍正の末から乾隆帝の時代といえばいわば清の絶頂期で

あり、康熙帝以来の儒教重視の政策の中で、自らを儒家思想の正統的な継承者と自認する夏敬渠が、士人としての理想的な有り様を表現しようとしたとの評価は頷けるものがある。また、作者自身がそうしたように、『野叟曝言』の主人公の文素臣も各地を旅して回る活躍を見せるが、それが小説の内容にふくらみを持たせているかどうかは、評価の分かれるところでもある。

さて、そこで辛巳本で正文が欠けていた部分についてであるが、壬午本の132回から135回をもとに内容を考察すると、文素臣がいわゆる外国の領域（インドや日本など）にまで遠征し、宗教戦争を仕掛けた箇所にあたる。

夏敬渠の死後、乾隆帝の時代から道光帝の時代へ移るとヨーロッパ諸国の中国進出が始まり、ロシアや日本もそれに続くことになるのだが、アヘン戦争に先立つ道光帝18年（1838）5月に提示された「道光十八年江蘇按察使裕謙憲示及計毀淫書目單」に『野叟曝言』の名が記されている[(6)]。これは、「淫書、淫画」を厳禁し風俗を正す目的で行われたものとのことで、百を越える作品が列挙されている。その目録は『紅楼夢』『金瓶梅』から『水滸』『今古奇観』までも含んでおり、少なくとも『野叟曝言』がそれらと並んで既に人の目にとまる存在であったことがうかがいしれるのである。ただ、それぞれについて理由が示されているわけではないので、『野叟曝言』のどこが「淫書」にあたるのかはわからないものの、内容に異教や異文化に対する偏狭な考え方が見られることがその理由であったのかもしれない。なお、道光24年（1844）10月の「道光二十四年浙江巡撫禁淫詞小説及禁毀書目」や同治7年（1864）4月の「同治七年江蘇巡撫丁日昌査禁淫詞小説及應禁書目」[(7)] には、『野叟曝言』の名は記されていない。道光18年に禁書の一つに数えられてより、『野叟曝言』を伝える者が罪を得るのを恐れて、意図的に四回分の正文を欠落させた可能性は否定で

きないであろう。

『野叟曝言』は、中国大陸において1990年代に入ってから相次いで出版されるようになり[8]、再び脚光を浴びつつあるようであるが、大陸で刊行が途絶えしばし忘れられた存在になっていた時期にも、台湾では何種類かの刊本が出版されている[9]。また、主に上海で出版された1920から30年代の『野叟曝言』が、台湾で今も保存されているのが確認できる[10]。1870年代には日本軍の侵攻を受け、日清戦争を経て1895年に日本へと割譲される台湾において、『野叟曝言』が如何に浸透していったのであろうか。

さて、そこへ行く前に、次章では日本における『野叟曝言』の受容と評価について考えてみたい。

## 2　日本における『野叟曝言』の受容と評価

### 2－1　山縣初男訳『野叟曝言』

最近は忘れ去られたようになっている感のある『野叟曝言』であるが、日本においては早くから知られており、広く認知された存在であった。

『野叟曝言』は過去に一度日本語訳が出版されている。翻訳者の山縣初男氏は、氏の著書『戦国策物語』の著者紹介によれば、「明治6年新潟生、士官学校卒、中国雲南省政府軍事顧問、八幡製鉄大治出張所長を経て、昭和19年末より上海方面で和平工作に従事、この間独学で中国語を学ぶ」とある。山縣氏は『老子の新研究』といった古典に関するものから、『中共領袖の素描』『東蒙古』といった中国近現代の歴史地理に関するものに至るまで幅広い著書を残しているが、その中にあって『野叟曝言』は著者自身が力を抜いて楽しんで書いたものではなかったかと思われる。



山縣氏は、夏敬渠『野叟曝言』の日本語訳を、まず昭和9年（1934）10月に『支那小説／野叟曝言』のタイトルで立命館出版部より出版するが

（二冊本）、同書を東京神田の秋豊園出版部より翌10年6月に『支那侠艶怪奇小説／野叟曝言』として出版し直した（一冊本）後、その続編として同10年10月に『支那小説／四嬌奇縁』、そしてさらにその翌11年5月に『侠艶記』を同出版部より出版し、都合三年をかけて全訳を完成させている。ちなみに、夏敬渠『野叟曝言』壬午本を基準に比較すると、第一部となる山縣版『野叟曝言』では、154回のうち45回までを四十二回にまとめ、第二部となる『四嬌奇縁』ではその続きから93回までを三十二回に、第三部となる『侠艶記』では120回までを二十八回にまとめ直し、最終盤の三十回余りについては省略して、合計一百二回の構成としている。章回ごとのタイトルについては、三分の一ほどは原タイトルを活かしているが、内容にあわせて短くまとめて付けたものが多く、必ずしも対句形式を取らない。山縣氏は、昭和15年7月には興亜書局より『大侠艶史（原名　野叟曝言）』の名で、先の秋豊園版『野叟曝言』をさらに二十三回に仕立て直したものを再び出版している。それだけこの『野叟曝言』に対しては思い入れがあったということであろうか。

山縣氏は『野叟曝言』の序文でその原著を以下のように紹介している。少し長いが全文引用してみる。

> 本書は、清朝康熙年間に、江蘇省江陰縣の人、夏某（或いは繆某ともいふ）の作る所と言はれて居る。夏某は、才學あり、深く理學に通じ、兵、詩、醫、算に長じて居ったが、終身志を得なかつた為め、晩年に此書を著して、憤を洩らしたものである。書中の文素臣と言ふのは、王陽明の事跡を取って、自ら素臣を以て居つたのである。　四八

ここでは「康熙年間」（在位1661-1722年）の作との説を取り、本書を著した動機については「憤を洩らし」た結果であるとする。つづけて本書

が世に出るきっかけとなったいきさつについて述べている。

本書漸く成る時、丁度、清の聖祖が、南方に巡視したので、之を奇麗に表装して、献上するつもりであったが、友人等は、之を献上すれば、必ず禍を招くと思ひて、止めたが、聴かないので、夏の妻に、止める様に勸めた。妻は、夏の知らない時に、毎冊の四五頁を、破って置いた、愈献上する時になって、夏が書冊を検べて見ると、紙數が破れて居るので、びつくりして、問ふと、子供が何も知らずに、破つたのだと言ふ。夏は大に怒つたが、最早献上に間に合はなかつた。夏某が死んでから、其の娘が、父の一生の心血を濺いだ所だと云ふので、之を埋没するに忍びず、遂に出版することにしたものだと云ふ。

文中の聖祖は康熙帝の廟号であるが、皇帝が南方に巡視した時に夏敬渠が書を献上しようとした逸話は乾隆帝の時のことであるとする説もあり(11)、ここは単に山縣氏が間違えたのか、元とした刊本の問題があるのか慎重に考える必要がある。

そして、序の最後に次のように賛辞を述べて締めくくっている。

本書は支那の古今を通じて、小説としては、最も奇抜なものであるが、しかもその主眼を、忠孝の二字に置いて、異端の邪説を排し、加ふるに、俠義を叙し、武力を記し、時に春態を描き、諧謔を縦ち、神怪を述ぶる等、場面の變轉は人の意表に出で、全く他小説の追従することが出来ない天下第一の奇書である。



魯迅には「学識と文才を誇示する」ものとして退けられた、いわば何でもありの姿勢がここではむしろ積極的に評価されているといえる。

付け足しになるが、山縣初男氏による『大侠艶史』の序文でも、

> 本書は水滸伝流の支那の大衆小説中の雄なるものである。支那一流の波瀾萬丈神出鬼没自由奔放を極めたもので、その昔日本の講釋は專らその筋を支那小説にとったものだが、事実国民性として空想力は到底これ等の支那作家に及ばない。
>
> 先に文芸作品「滅亡」を出したのに続き、薬味の意味でこの通俗小説を中に挟んだ。更に広く支那小説の読者を求めん為である。
>
> 全訳にすると大体この二倍の頁数になるので、傍系の筋を省き、又支那のこの種の書物にあり勝ちな春態の場面等を削除して健康明朗な、一種の娯楽読物として発行することにした。(以下略)

と、『水滸伝』をはじめとする「大衆小説」の系譜の中に正当に位置づけており、魯迅以来の中国での評価に比し格別なものとなっている。

### 2－2　山縣版『野叟曝言』の省略部分

さて、山縣氏が日本語訳を著すにあたって、章の回数だけを単純に比較しても原著を省略した部分が終盤の三十回以外にも約二十あるわけだが、その省略の基準はどこに置いていたのであろうか。

山縣氏は三部作の最後にあたる『侠艶記』の第28回（最終話）「皇女降嫁」の末尾に、「譯者申す」として、次のように述べている。

> 野叟曝言、四嬌奇縁及本書を通し譯して既に百回に及び。途中、往々省略せる處あるも、猶ほ數十回に至るものあり、然れども、以後は、讀者の興味を引くべきもの少なきを思つて、左に、物語の概略を擧げて、稿を終へることとした。

以下概略が述べられたあとで、「讀者、猶ほ詳細に知らんと欲せば、請ふ原書野叟曝言を一讀せらるるか、若くは譯者の蝸盧を訪はれよ。昭和丙子卯月　於東都郊外　譯著者敬白」との言葉で締めくくっている。

「途中、往々省略せる處」については後に考察するとして、読者の興味を引くことが少ないとした最後の三十回には、壬午本で付け加えられたとされる四回分を含んでいるのである。その部分について山縣氏は「譯者申す」の中でこう紹介している。少し長いが全文引用してみる。（傍点渡邊）

素臣の長子文龍は、九歳にして進士に及第、直に浙江、山東、福建の巡察按使となりて、成績を擧げ、その後、龍天生、鐵如包、及び福建の六雄等を統率して、東方を征服す。

素臣の次子文麟は、沈雲北、熊奇、成全、伏波、金硯、松紋、韋忠等の各夫婦、翠蓮、碧蓮等を率ゐ、新疆、西藏を經て、印度、縮甸等の諸国を征服す。

鐵面夫婦は、許されて島主に復任。

文容、奚勤は、倭國に使して、關白の爲に殺さる、文容の遺子、寢生（雲氏の子）長生（賽奴の子）は文龍が東方征服の後、倭王女の婿となる。

文恩卽ち奚囊は、恩賜の藥を飲んで、閹割より復活し、後、文龍の推擧に依り、寢生、長生の後見として、東方を管理す。

素臣は其後、佯つて病と稱し、門を出でざる事、七年、上○崩御に及んで、始めて、再び出でて宰相となり、天下に令し、佛教及道教を禁ず。

四五

景日京は、兄の敬亭、及、素臣の叔父、水何如と共に、海島の兵を率ゐて、歐洲に渡り、二十餘國を征服し、大人文國を建設す。

水夫人百歳の壽宴に於て、景日京の使者は、大人文國、其他歐洲二

十餘國の使臣と共に來朝、祝意を表し、素臣等は始めて、日京の消息が分る。

素臣は、此時八十歳に達し、二妻五妾の間に子、孫、曾孫等百人に達す。

このように、文素臣の子等による「新彊、西藏、印度、縮甸（ミャンマー）」、そして「倭国」つまり日本への遠征、さらには、素臣による仏教道教の禁止、欧州遠征のあらましが述べられるのである。

1920年代後半には日本は既に中国への侵攻を開始し、31年にはいわゆる「九・一八（満州事変）」がおこる、そんな時代の中でこの翻訳はなされている。ことさらにそれを強調するべきではなかろうが、上の文中にも「上〇崩御」とあるように、出版に当たっては伏せ字が多く用いられるような時代の雰囲気と、士官学校出の山縣氏の経歴とを考え併せると、終盤三十回を単に「讀者の興味を引くべきもの少なきを思つて」省略したとのことばを、文字通りには受け取りにくいようにも思う。

『野叟曝言』壬午本で付加されたとする四回のうち132から134回はおもに日本遠征が描かれている部分である。上の山縣氏による概略に「文容、奚勤は、倭國に使して、關白の爲に殺さる」とあるが、関白「木秀」は、そのモデルが豊臣秀吉とされ、まさに憎き敵役として設定されている。素臣の子文龍が征倭大将軍として、東京を攻略し、琉球を取り、倭民を降伏させるいきさつが描かれているという内容が省略の理由となってはいなかったろうか。

途中の省略部分に関しても、たとえば三部作の二部にあたる『四嬌奇縁』を壬午本『野叟曝言』と照らし合わせてみると、『四嬌奇縁』第13回が壬午本第58回にあたり、第14回が第65回、さらに第15回が第67回にあたる。つまり13回と14回の間に壬午本六回分の抜けがあり、14回と15

回の間にも一回分の抜けがあるのだが、山縣氏の文章を追う限りそこに大きな欠落があるようには見られない。『四嬌奇縁』第15回では素臣と飛熊が「倭賊」が来たという噂について語るのであるが、そのやりとりの中に、壬午本66回にある「日本へ行った」云々という話は出てこない。こういったところからも、山縣氏がかなり緻密な配慮の上、原文を取捨選択して再構成したのではないかと考えられるのである。

## 3　史艶文と『野叟曝言』

現在でも、布袋戯から生まれたキャラクターの中で真っ先に名前の挙がるのが「史艶文」である。ここでは台湾布袋戯の歴史を細かくたどることは省略するが、現在の布袋戯人気の引き金になったのは、間違いなく70年代に黄海岱氏の次男黄俊雄氏が始めたテレビ人形劇『雲州大儒侠――史艶文』であった。その放映当時は、テレビのカラー化の波と相俟って、テレビ用に改良された人形の造形と善悪入り乱れたストーリー展開が視聴者に受け、瞬く間に高視聴率を獲得し、テレビ見たさに学校を休む生徒も現れるなどその人気が社会問題化し、政府が75年から82年までテレビ人形劇を放送禁止としたほどであった。放送解禁後は、黄海岱氏の孫である黄強華、文擇兄弟が中心となって、92年に布袋戯専門の番組制作会社を設立、95年には専門の衛星放送チャンネルを立ち上げ、数多くの人気シリーズを作り上げながら現在に至っている。いわば、現代の布袋戯隆盛の基礎を築くのに最も大きく貢献したのは、三世代に渡る黄海岱氏の一族なのである。さて、黄俊雄氏がブームを巻き起こした『雲州大儒侠――史艶文』ではあるが、俊雄氏がそもそもその原作として参考にしたのは父黄海岱氏が創作した『忠勇孝義傳』(12) であった。

日本の統治下の台湾においては、中国文化は禁止されたものの、台湾独

自の文化は当局の関与を受けなかったため、1900年代半ばまでは布袋戯の活動はむしろ活発さを増し、黄海岱氏は20代の終わりには既に弟の程晟とともに父から受け継いだ人形劇団「五洲園」を率いて人気を博していたと伝えられている。ところが、黄氏はそんな順調な時期に弟にかかわる事件が元で突然九ヶ月の拘留処分を受けることになってしまうのだが、これがある意味、黄氏にとって大きな転機になったと考えられる。

不意に訪れた空白時間は自身の活動を見つめ直すよい機会となったようで、釈放後、日本の刑事から受けた拷問の傷を癒すための二ヶ月の静養時期を利用して研究したのが『野叟曝言』であったとされているのである。黄海岱氏は、『野叟曝言』に感銘を受け、それをもとに「文素臣」という演目を作り各地で上演していたが、1937年の盧溝橋事件（七七事変）により日中戦争へと突入してからは、台湾においてもさらに文化的制限が加えられ、『野叟曝言』も「文素臣」の演目も禁じられることになった。そこで、黄氏はさらに『野叟曝言』を改編して『忠勇孝義傳』を著し、文素臣に代わって「史炎雲（史艶文）」というキャラクターを案出し、40年代に皇民化運動が始まって台湾文化が全面的に禁止されるまでの数年間、その演目の上演を続けたということである[13]。

伝えられるところの黄海岱氏自身のことばの中に日本に対する恨みのようなものを見つけ出すことはほとんどないのであるが、1930年代というこの時期の日本との関わりの中で英雄「史艶文」は誕生したと言ってよい。

## 4　結　　語



『野叟曝言』はその内容に既に日本の影を含むのに加え、それが刊本として成立し伝播していく過程で再び日本との関わりが鮮明になっていくという、日本との因縁浅からぬ書であるといえる。ただし、本稿では紙面の

関係で、『野叟曝言』の成立と中国、日本、台湾における受容の歴史の一端を見てきたに過ぎず、個々の事実関係の精査や、相互の関連性に関する考察についてなど書ききれなかった部分も多い。とりわけ、台湾において『野叟曝言』から「史艶文」へと変貌を遂げる過程については、その背景と内容上の問題などについて改めて稿を起こして考察することにしたいと思う。

## 注

1　魯迅『小説舊聞鈔』(1926) の、夏敬渠『綱目挙正』の条では、夏敬渠の子である祖耀の言を引いて、この書物を乾隆丙午 (1786) 南方行幸の際、蘇州に赴いて、自ら献上をはかって阻止されたことがある、と記している。これを根拠とすれば、その数年前には『野叟曝言』が成立していたと考えられる。なお、『絵図真本野叟曝言』(1～20、150 回、十冊二帙、存宝参刊。名古屋大学蔵) に、乾隆 3 年の原序があるとの記録があるが、未見。

2　『中国古代禁毁小説漫話』(李時人等著、漢語大詞典出版社、1999) の「《野叟曝言》: 封建時代読書士子心態曝光」の項 (P. 329～337) では、徐再思 (1890～)『澄江舊話』(巻 2「何聽松・野叟曝言補聞」) の説に基づいてこのように説明している。

3　辛巳本系統の出版物としては、『古本小説集成』(上海古籍出版、1992) に収められた『第一奇書野叟曝言』が、復旦大学蔵の毘陵彙珍樓活字印本の影印本である。

4　壬午本の西岷山樵の序では、夏敬渠が西岷山樵の先祖に語った言として「士生盛世、不得以文章経濟顕于時、獲將以経濟家之言、上鳴國家之盛、以與得志行道諸公相印證。是書托于有明、窮極宦官權相妖僧道之禍、言多不祥、非所以鳴盛也。」と述べ、夏敬渠自身が『野叟曝言』刊行に積極的でなかったことを紹介している。その先祖は、夏敬渠から『野叟曝言』に評注を付けることを許され、その際に夏敬渠に内緒で副本を保有したことも記されている。この説に従えば、副本の由来については『澄江舊話』の説とはいささか異なることになる。

5　『小説書坊録』(王清原ら編纂,北京図書館出版社、2002) の調査によれば、明代から民国までの間に刊行された『野叟曝言』の刊本は次の四種であるとのこと。

- 毘陵彙珍楼『第一奇書野叟曝言』光緒 7 年 (1881) 活字印　二十巻 152 回
- 上海申報館『第一奇書野叟曝言』光緒 8 年 (1882) 鉛印　二十巻 154 回
- 広東書局　『野叟曝言』光緒 8 年石印　154 回

・上海　国華新記書局　鉛印『古本野叟曝言』(民国)

6 『中国古代禁忌小説漫話』の付録(p. 417-9)に載せるところの、余治の『得一録』(巻11)より引用。『得一録』の残巻(巻13〜16)は内閣文庫にある。

7 同『中国古代禁忌小説漫話』の付録(p. 419-24)に載せる。

8 90年代以降の中国における『野叟曝言』の出版はのべ二十近く確認できる。以下出版年順に紹介しておく。(タイトルは省略。)

・上海古籍(92)二十巻152回　古本小説集成(復旦大学図書館蔵本影印)
・青島出版(92)／　・長春出版(93)／　・長沙　岳麓書社(93)
・北京　人民中国出版(93)／　・作家出版社(93)中国古典名著珍蔵本
・吉林文史(94)／　・北京　人民文学出版(97)
・鄭州　中州古籍(93)／　・吉林文史出版(98)古典小説名著珍蔵本
・大衆文芸出版社(99)中国禁毀小説資料叢書／　・北京華齢出版(99)
・中国社会出版(99)／　・戯劇出版(00)古代禁毀小説珍秘本集成
・戯劇出版(00)古代禁毀小説百部／　・戯劇出版(00)中国言情小説精選
・戯劇出版(00)中国秘笈善本小説／　・長春　時代文芸(01)

9 戦後の台湾での出版ではおおむね次の六系統である。

・世界書局(世界文庫)(57, 62, 68など)
・文化(77, 82, 88など)／　・瑞成(台中、不明)
・台湾文源(79など)、「文素臣155回」(82)のタイトルのものもあり
・天一出版(85)明清善本小説叢刊初編第10輯(烟粉小説)
・三民(2003)

その他香港の文光(55)100回本があるが、内容は別物とのこと。

10 主なものは以下の通りである。

・『剣骨琴心、又名、文素臣(原著野叟曝言)』上海好青年書館(29)
・『古本野叟曝言』正続集　上海新生出版社(29)
・『古本野叟曝言』時希聖標点　上海中央書店(34)
・『野叟曝言』何銘標点　上海恵記書局(35)
・『文素臣』湖上漁隠標点　上海新文化書社(39)

11 注1参照

12 「忠孝節義傳」とするものもあり。

13 主として『黄海岱及其布袋戯劇本研究』(張溪南著、台灣學生書局2004)第四章「黄海岱布袋戯「史艶文」相関劇本」、及び『雲林縣布袋戯発展史、暨布袋戯宗師黄海岱傳奇』(陳木杉編著、台灣學学生書局2000)第五章「布袋戯宗師黄海岱簡介」を参考とする。前者は黄海岱氏自身からの聞き取り調査も資料の一つとしている。